

『後山詩話』 訳注稿（一）

北宋・陳師道 著

青木沙弥香・竹澤英輝・許山秀樹
松尾肇子・三野豊浩・矢田博士 訳注

〔解題〕

陳師道、字は無己、またの字は履常、自ら後山居士と号した。彭城（江蘇省徐州）の人。北宋・仁宗の皇祐五年（一〇五三）に生まれた。家が貧しいながらも勉学に励み、十六歳の時に曾鞏に師事した。神宗の時、王安石の新法が行われたため、仕官を望まず貧困を極め、そのあまりの貧しさに、妻と子は岳父に引き取られることになった。哲宗の元祐二年（一〇八七）四月、蘇軾の推薦により、徐州教授に任命され、七月に太学博士となり、ようやく妻子を呼び戻すことができた。その後は、潁州教授、秘書省正字などを歴任し、徽宗の建中靖国元年（一一〇二）十二月に四十九歳で亡くなった。

蘇軾と交流があり、黄庭堅・秦觀・張耒・晁補之・李廌とともに、「蘇門の六君子」と称される。また、著に『後山集』二

十四卷、『後山詩話』一卷、『後山談叢』四卷がある。

本稿は、陳師道の著した『後山詩話』の訳注稿である。「詩話」とは、詩にまつわる逸話や理論・評論などを書き綴ったもので、北宋・欧陽脩の『詩話』がその始まりとされる。今回は、全部で八十四節からなるうちの第一節から第二十節を掲げる。

ところで、現行の『後山詩話』には、蘇軾や黄庭堅、秦觀を批判した記述が見られることや、明らかに陳師道の没後の逸話が記されていることなどから、陳師道の作とすることに對して、疑問視する説が見られる（『四庫全書總目』卷一九五「集部・詩文評類一」『後山詩話』一巻を参照）。しかし、かりに陳師道の作でなかったとしても、『後山詩話』という著作が北宋の時代の文学思潮を窺い知るうえで、貴重な情報を提供してくれるものであることは、疑いのない事実であり、その資料的価値を損

なうものではない。

【凡例】

◇ テキストは、清・何文煥輯『歴代詩話』（中華書局、一九八一年四月第一版）を底本とした。

◇ 底本で校異が示されている部分については、原文に〔校一〕、〔校二〕……と付してその箇所を示し、【校異】の項目を設けて訳出した。

◇ 【訓読】の項目の書き下し文については、漢字の読み（ルビ）は現代仮名遣いを、送り仮名は旧仮名遣いを用いた。

一

王師圍金陵、唐使徐鉉來朝。^{〔校二〕}鉉伐其能、欲以口舌解圍。謂太祖不文、盛稱其主博學多藝、有聖人之能、使誦其詩。曰、「秋月」之篇、天下傳誦之。其句云云。太祖大笑曰、「寒士語爾、我不道也」。鉉内不服、謂大言無實、可窮也、遂以請。^{〔校二〕}殿上驚懼相目。太祖曰、「吾微時自秦中歸、道華山下、醉臥田間、覺而月出、有句曰、『未離海底千山黑、纔到天中萬國明』」。鉉大驚、殿上稱壽。

【校異】

校一：「朝」の字は、もとは脱落していた。清・張鈞衡の『適園叢書』本（『陳後山集』三十卷）によって補う。

校二：「遂」の字は、もとは脱落していた。前掲本によって補う。

校三：「吾」「山」の字は、もとは脱落していた。適園本によって補う。

【訓読】

王師 金陵を囲み、唐使の徐鉉 来朝す。鉉 其の能を伐り、口舌を以て囲みを解かんと欲す。太祖文あらずと謂ひ、盛んに其の主の博學多芸にして、聖人の能有るを称へ、其の詩を誦せしむ。曰く、「秋月」の篇、天下之を伝誦す、と。其の句云云。太祖 大いに笑ひて曰く、「寒士の語なるのみ、我は道はざるなり」と。鉉 内に服せざるも、大言無実なること、窮むべきなりと謂ひ、遂に以て請ふ。殿上 驚懼して相ひ目す。太祖曰く、「吾微なる時、秦中より帰り、華山の下に道し、田間に醉臥せしとき、覚むるに月出づ、句有りて曰く、『未だ海底を離れざるとき 千山黒く、纔かに天中に到れば 万国明らかなり』と」と。鉉 大いに驚き、殿上 寿を称す。

【語釈】

*金陵：今の江蘇省南京市。ここでは、五代十国・南唐の都を指す。

*徐鉉：南唐の人。後に南唐の後主・李煜に従い、宋に帰順した。『宋史』卷四四一に伝がある。徐鉉が南唐の使者として北宋の朝廷を訪れた

のは、宋・太祖の開寶八年（九七五）のこと（夏承燾著『唐宋詞人年譜』中華書局、一九六一年）。

*其主：南唐の後主・李煜を指す。学問を好み、書画音楽など多くの芸術に優れ、詞を得意とした。

*秋月之篇：未詳。前出の夏承燾著『唐宋詞人年譜』は、北宋・王陶の『談淵』の以下の記述に見える「詠扇詩」と同じものとする。——太祖

一日小宴、顧後主曰、「聞卿能詩、可舉一聯」。後主思久之、乃舉「詠扇詩」。云、「揖讓月在手、動搖風滿懷」……。「太祖 一日小宴せし

とき、後主を顧みて曰く、「卿は詩を能くすと聞く、一聯を挙ぐべし」と。後主 思ふこと久しくして、乃ち「扇を詠ずるの詩」を挙ぐ。

云ふ、「揖讓すれば 月は手に在り、動搖すれば 風は懐に満つ」と。……。「——ただし、『談淵』のこの記述は、南唐の後主・李煜が囚

われた後の事を記しており、囚われる直前の事を記した本節とは、場面が明らかに異なる。因みに、『詠扇詩』の二句は、「両手を組ん

で会釈をすれば、月のように丸い扇は手の上であり、それを揺り動かせば、風が懐に満ちる」という意で、ここでの月は、团扇の形を

比喩的に形容したもので、月そのものを詠ったものではない。

また、田居儉著『李煜伝』（当代中国出版社、一九九五年）では、「三臺令」の末尾の二句とする。ただし、明確な論拠は示されていない。

「三臺令」の全文は以下の通り。——不寐倦長更、披衣出戸行、月寒秋竹冷、風切夜窓声。「寐ねずして長更に倦み、衣を披ひて戸を出でて行く、月 寒くして 秋竹 冷ややかに、風 切にして 夜窓

声あり）。——

*謂大言無實、可窮也：「大言」は、大風呂敷をひろげること。「無實」は、真実ではないこと。「窮」は、突き詰める、の意。太祖の「寒士語爾、我不道也」という発言が、大風呂敷をひろげただけで事実無根であることを追及できると思つた、ということ。

*微時：身分が低く、まだ名が現れないとき。

*秦中：今の陝西省中部一帯の地をいう。

*華山：今の陝西省華陰市の南にある山。五岳の一つに数えられる。

*「未離」の二句：『全宋詩』巻一には、この二句のみを引く。

【通釈】

宋の軍隊が金陵を包囲すると、南唐の使者の徐鉉が来朝した。徐鉉は自分の能力を誇り、弁舌をふるつて包囲を解除しようと思つた。太祖には文芸に関する才能がないだろうと思ひ、そこで自分の君主が博学多芸で、聖人に並ぶほどの才能があることを称賛し、君主の詩を朗唱させた。そして次のように言つた。「この『秋月』の作は、天下の人々がこぞつて詠い伝えていきます」と。その詩の内容は云々。太祖は大笑いして言つた。「うらぶれた男の言葉にすぎぬ。私はそんな詩は詠まんよ」と。徐鉉は内心不服であつたが、その言葉が単なる大風呂敷にすぎないことを追及できると思ひ、そこで「それでしたら御作を拝聴したい」と願ひ出た。殿中の家臣たちは、徐鉉の大胆な要望に驚愕し、互いに顔を見合わせた。太祖が言うには、「私がまだ微賤の時のことであつた。秦から帰る際、華山の麓を通り、畑の中で酔つて寝たとき、目が覚めたら月が出ていた。その時できたのが、『月がまだ海底

から離れていないとき、幾千の山は暗かったが、天にほんの少し顔を出しただけで、幾万の国が明るくなった』という句だ」と。徐鉉はその詩のすばらしさに驚き、殿中の家臣たちは万歳を叫んだ。

一一

孟嘉落帽、前世以爲勝絶。杜子美「九日」詩云、「羞將短髮還吹帽、笑倩旁人爲正冠」。其文雅曠達、不減昔人。故謂詩非力學可致、正須胸肚中泄【校】爾。

【校異】

校一：「故」の字は、もとは脱落していた。「胸肚中泄」は、もとは「胸中度世」に作っていた。適園本によって補いかつ改める。

【訓読】

「孟嘉落帽」、前世 以て勝絶と為す。杜子美の「九日」詩に云ふ、「羞づらくは短髮を將つて還た帽を吹かるるを、笑ひて旁人を倩やとひて為に冠を正さしむ」と。其の文雅曠達、昔人に減ぜず。故に謂へらく、詩は力學して致すべきに非ず、正に須らく胸肚中より泄らすべきのみ、と。

【語釈】

* 孟嘉落帽：『晋書』卷九十八「孟嘉伝」に見える故事を踏まえる。その故事の大意は、以下の通り。――桓温が主催した九月九日の宴会の折り、風が孟嘉のかぶりものを吹き落とした。孟嘉は気付かずいた。やがて孟嘉が廁に立った折り、桓温はそれを手に取り、孫盛に命じて作らせた孟嘉をからかう文とともに、孟嘉の席に置いておいた。席に戻った孟嘉は、その文を見ると、すぐさま文を作つて答えた。その文のすばらしさに周りの者はみな感心した。――因みに、人前で頭を露わにするのは非礼とされていた。

* 前世：広く前の時代を指す。

* 杜子美「九日」詩：唐・杜甫の七言律詩「九日藍田崔氏莊」を指す。

引用の二句は、その頷聯。

* 文雅曠達：「文雅」とは、典雅で上品であること。「曠達」とは、思いがのびのびと広がっているさま。

* 力學：努力して知識を習得すること。

* 胸肚：胸と腹。ここでは、心の奥から自然と湧き起る感情を言う。

【通釈】

「孟嘉落帽」は、かねてより絶妙の故事とされている。杜甫の「九日」詩に言う、「恥ずかしいことに、髪が薄くなり、かぶりものが風に吹き落とされてしまう。照れ隠しに笑いながら、隣の人に冠を正しくかぶらせてもらう」と。その詩は典雅で奥ゆきがあり、古人に劣らない。だから、詩は学問に頼つて努力して作るべきものではなく、心の奥から自然と湧き出てくる詩情によって紡ぐべきな

のだと思う。

二二

望夫石在處有之。古今詩人、共用一律、惟劉夢得云、
「望來已是幾千歲、只似當年初望時」。語雖拙而意工。

黄叔達、魯直之弟也。以顧況爲第一。云、「山頭日
日風和雨、行人歸來石應語」。語意皆工。江南有望夫石、
每過其下、不風即雨、疑況得句處也。

【校異】

校一：「劉」の字は、もとは脱落していた。適園本によつて補う。
校二：「達」の字は、もとは「度」に作る。適園本によつて改める。

【訓読】

望夫石 在処に之有り。古今の詩人、共に一律を用ふるも、惟だ劉夢得のみ云ふ、「望み来たりて已に是れ幾千歳、只だ似たり 当年初めて望みし時に」と。語は拙なりと雖も意は工なり。

黄叔達は、魯直の弟なり。顧況を以て第一と爲す。云ふ、「山頭 日日 風 雨に和し、行人 帰り来たれば 石 応に語るべし」と。語意 皆な工なり。江南に望夫石

有り、其の下を過ぐる毎に、風あらずんば即ち雨、疑ふらくは況の句を得し処ならん。

【語釈】

*望夫石：夫の帰りを山に登つて待ち続けた妻が石に化してしまつたという伝説に基づく岩。望夫石に関する専論に、松岡正子論文「望夫石伝説」（『中国文学研究』第十一期、早稲田大学中国文学会、一九八五年）がある。

*一律：千篇一律の意。唐・韓愈「南陽樊紹述墓誌銘」に、以下のようにある。——惟古於詞必已出、……從漢迄今用一律。（惟だ古の詞に於けるは必ず已より出づ。……漢より今に迄び一律を用ふ。）——

*劉夢得：唐・劉禹錫のこと。夢得はその字。引用の二句は、七言絶句「望夫石 正對和州郡樓」詩の転句と結句。起句と承句は以下の通り。——終日望夫夫不歸、化爲孤石苦相思。（終日 夫を望むも 夫は帰らず、化して孤石と爲るも 苦だ相ひ思ふ。）——

*黄叔達：北宋・黄庭堅（字は魯直）の弟。字は知命。
*顧況：唐の詩人。ただし、引用の二句は、実は唐・王建の「望夫石」詩の一節。全文は以下の通り。——望夫處、江悠悠、化爲石、不回頭、山頭日日風復雨、行人歸來石應語。（夫を望むの処、江は悠悠たり、化して石と爲るも、頭を回さず、山頭 日日 風 復た雨、行人 帰り来たれば 石 応に語るべし。）——

この誤りについては、南宋・吳曾の『能改齋漫錄』卷三に以下のようにならう。——予家有王建集、載「望夫石」詩。乃知非況作。其全章云、「……」。豈無已叔達偶忘王建作耶。（予の家に王建の集有り、「望夫石」詩を載す。乃ち況の作に非ざるを知る。其の全章に云ふ、「……」と。豈に無己と叔達 偶たま王建の作たるを忘れたるか。）——「無己」は、陳師道の字。

【通釈】

望夫石はあちらこちらにある。望夫石を詠んだ古今の詩人の作品は千篇一律だが、劉禹錫だけは異なっていて次のように言う、「じつと見続けてすでに数千年、夫の帰りを待ち望んだ当時の姿のままであるかのようだ」と。言葉は拙いが着想は巧みである。

黄叔達は黄庭堅の弟である。彼は（望夫石を詠った詩人の中では）顧況を第一の詩人と考えた。顧況の詩に次のように言う、「山頂には日々、雨まじりの風が吹いている。旅に出た夫が帰ってきたならば、石と化した妻はきつと語りかけるだろう」と。言葉も着想も巧みである。江南地方に望夫石があり、その下を通り過ぎるたびに風に吹かれるか雨に降られるかする。ここがきつと顧況がこの句を得たところなのであろう。

四

歐陽永叔不好杜詩、蘇子瞻不好司馬『史記』。余每與黃魯直怪嘆、以爲異事。

【訓読】

歐陽永叔は杜詩を好まず、蘇子瞻は司馬の『史記』を好まず。余 毎に黄魯直と怪嘆し、以て異事と為す。

【語釈】

* 歐陽永叔：北宋・歐陽脩のこと。永叔はその字。唐宋八大家の一人。
* 蘇子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。唐宋八大家の一人。

【通釈】

歐陽脩は杜甫の詩を好まず、蘇軾は司馬遷の『史記』を好まなかった。私はいつも黄庭堅とともに不思議なことだと訝かしく思った。

五

費氏、蜀之青城人。以才色入蜀宮、後主嬖之。號花蕊夫人、效王建作宮詞百首。國亡、入備後宮。太祖聞之、召使陳詩。誦其「國亡」詩云、「君王城上豎降旗、妾在深宮那得知。十四萬人齊解甲、更無一個是男兒」。太祖悅。蓋蜀兵十四萬、而王師數萬爾。

【訓読】

費氏は、蜀の青城の人なり。才色を以て蜀宮に入れら

れ、後主 之を嬖^{めと}る。花蕊夫人と号し、王建に效ひて宮詞百首を作る。国亡びて、入りて後宮に備へらる。太祖之を聞き、召して詩を陳べしむ。其の「国亡」詩を誦して云ふ、「君王 城上 降旗を豎^たつ、妾は深宮に在り 那ぞ知るを得ん。十四万人 齊しく甲を解く、更に一個として是れ男兒なるは無し」と。太祖 悦ぶ。蓋し蜀兵は十四万にして、而して王師は数万のみなればなり。

【語釈】

* 費氏：五代十国の一つ、後蜀の主・孟昶の夫人。

* 王建：唐の詩人。楽府に長じ、宮詞百首がある。

* 宮詞：宮廷の秘事や遺聞を詠じた詩。玄宗の宮廷生活に関する伝聞を王建が七言絶句にしたのが最初とされる。その後、費氏が自らの経験をもとに宮詞百首を作り、さらに、北宋の王珪が宮詞百首を作り、併せて三家宮詞という。

* 甲：武器全般を指す。ここでは、平声の「兵」が使えないため、仄声の「甲」を代わりに用いた。

【通釈】

費氏は蜀の青城の人であった。才色が秀でていたので、蜀の宮中に入り、後主に娶られた。花蕊夫人と名乗り、王建にならつて、「宮詞百首」を作った。蜀が減んだ後、宋の後宮に入れられた。太祖はそのことを聞いて、呼び寄せて詩をよませた。その「国亡」詩を朗唱して言った。

「君王は城壁の上で白旗を掲げられましたが、私は宮中奥深くにおりましたので知るよしもありませんでした。十四万人の兵士たちは一斉に武器を捨て、立ち上がって抗戦する益荒男は一人としていなかったのです」と。太祖は喜んで聞いた。蜀の兵士は十四万人であったが、宋軍は数万に過ぎなかったからであろう。

六

韓退之「南食」詩云、「蠻實如惠文」。『山海經』云、「蠻如惠文」。惠文、秦冠也。「蠪相黏爲山」。蠪、牡蠣也。

【訓読】

韓退之の「南食」詩に云ふ、「蠻^{まう}は実に惠文の如し」と。『山海經』に云ふ、「蠻は惠文の如し」と。惠文とは、秦の冠なり。「蠪は相ひ黏して山と爲る」。蠪とは、牡蠣^{ほれい}なり。

【語釈】

* 韓退之：唐・韓愈のこと。退之はその字。唐宋八大家の一人。

* 「南食」詩：韓愈の「初南食貽元十八協律」詩を指す。全二十八句からなる五言古詩で、「蠻實如惠文」の句はその第一句。「蠪相黏爲山」の句はその第三句である。

* 蠪：カニの一種。カプトガニ。海中に生息し、腹部に六対の足を持ち、

目は背中の上にある。また雌が背中に雄を背負って泳ぐ習性がある。『文選』卷五所収の西晋・左思「吳都賦」の李善注に引く、劉逵の注に以下のように言う。——蟹、形如惠文冠。青黑色、十二足、似蟹。足悉在腹下、長五六寸。雌常負雄行。漁者取之必得其雙。故曰乘蟹。南海・朱崖・合浦諸郡皆有之。〔蟹 形は惠文の冠の如し。青黑色、十二足にして、蟹に似たり。足は悉く腹下に在り、長さ五六寸。雌は常に雄を負ひて行く。漁者 之を取るに必ず其の双を得たり。故に乘蟹と曰ふ。南海・朱崖・合浦の諸郡 皆な之有り。〕——

* 惠文：冠の名。戦国時代・趙の武靈王が胡服に倣って作った冠に、さらに子の惠文王が裝飾を加えた物。形はカブトガニに似る。

* 山海經：古代の神話と地理の書。ただし、引用されている一節は、現行の『山海經』には見えない。『玉篇』卷二十四「魚部」に、「山海經云」として、前掲の劉逵の注と似た記述があり、そこに見える。ただし、「形如惠文冠」を「形如車文」に作る。

【通釈】

韓愈の「南食」詩に言う、「蟹は本当に惠文のようだ」と。『山海經』にいう、「蟹は惠文のようだ」と。「惠文」とは、秦の時代の冠のことである。韓愈は続けて「蠓は互いにくつつきあって山のようになる」という。「蠓」とは、牡蠣かきのことである。

七

白樂天云、「笙歌歸院落、燈火下樓臺」。又云、「歸

來未放笙歌散、畫戟門前蠟燭紅」。非富貴語、看人富貴者也。

【訓読】

白樂天云ふ、「笙歌 院落に帰り、灯火 樓台を下る」と。又た云ふ、「帰り来たりて未だ放たず 笙歌の散ずるを、画戟の門前 蠟燭紅なり」と。富貴の語に非ず、人の富貴を看る者なり。

【語釈】

* 白樂天：唐・白居易のこと。樂天はその字。元稹と交流があり、ともに平易の詩を目指した。北宋・蘇軾は、「祭柳子玉文」の中で、彼らの詩を評して、「元輕白俗」と言う。

* 「笙歌」の二句：五言律詩「宴散」詩の頷聯。

* 「歸來」の二句：七言律詩「夜歸」詩の尾聯。ただし、『全唐詩』卷四四三は、「門前」を「門開」に作る。

【通釈】

白居易の詩に言う、「笙の音に合わせて歌うなか、中庭を通って帰り、灯火を頼りに楼を下っていく」と。また言う、「戻ってきてみると、まだ笙の音や歌声が続いており、美しい戟が置かれた門には灯火が赤々と輝いている」と。これらは、富貴の人の言葉ではなく、他人の富貴を見ている人の言葉である。

八

楊蟠「金山」詩云、「天末樓臺橫北固、夜深燈火見揚州」。王平甫云、「莊宅牙人語也、解量四至」。

吳僧「錢塘白塔院」詩曰、「到江吳地盡、隔岸越山多」。余謂分界墩子語也。

【訓読】

楊蟠の「金山」詩に云ふ、「天末 樓台 北固横たはり、夜深く 灯火 揚州を見る」と。王平甫云ふ、「莊宅の牙人の語なり、解く四至を量る」と。

吳の僧の「錢塘の白塔院」詩に曰く、「江に到りて吳地 尽き、岸を隔てて越山多し」と。余 謂へらく、分界の墩子の語なり、と。

【語釈】

*楊蟠：北宋の人。詩によって名を知られ、元祐年間に蘇軾としばしば詩の唱酬をした。

*「金山」詩：七言律詩「陪潤州裴如晦學士遊金山回作」。引用の二句は、その頸聯。『全宋詩』卷四〇九では、「天末」を「天遠」に作る。

*北固：山の名。現在の江蘇省鎮江市の東北にある。三国六朝以来の要衝として知られる。

*王平甫：北宋・王安石のこと。平甫はその字。王安石の弟。

*莊宅牙人：不動産を扱う仲買人。

*吳僧：未詳。『全宋詩』卷三七五一に、この二句のみが収録される。

*分界墩子：「分界」は、境界のこと。「墩子」は、土地の境界に置いた距離を示す塚。五里ごとに単塚を、十里ごとに双塚を置いた。

【通釈】

楊蟠の「金山」詩に言う、「天の彼方、樓台をのせて北固の山が横たわり、夜が深まり、灯火を点した揚州の城市が目に映る」と。王安石が評して言うには、「まるで不動産を扱う仲買人の言葉のようだ。土地の四方の様子をよく知っているにすぎない」と。

吳の僧の「錢塘の白塔院」詩に言う、「長江に着いて吳の地が終わり、川を隔てて越の山がたくさん見える」と。私が思うに、ほとんど境界の道標に記された言葉のようだ、と。

九

黄魯直云、「杜之詩法出審言、句法出庾信。但過之爾。

杜之詩法、韓之文法也。詩文各有體。韓以文爲詩、杜以詩爲文。故不工爾。」

【訓読】

黄魯直云ふ、「杜の詩法は審言より出で、句法は庾信より出づ。但だ之を過ぐるのみ。杜の詩法、韓の文法なり。詩文は各おの体有り。韓は文を以て詩を為り、杜は詩を以て文を為る。故に工たくみならざるのみ」と。

【語釈】

*詩法：詩の作り方や規律。時代は後になるが、南宋・嚴羽の『滄浪詩話』

「詩弁」に、以下のように言う。——詩之法有五。曰體製、曰格力、

曰氣象、曰興趣、曰音節。「詩の法に五有り。體製と曰ひ、格力と曰

ひ、氣象と曰ひ、興趣と曰ひ、音節と曰ふ」。——市野沢寅雄氏は、

それぞれ「詩の製作風」「発想や用語の重力」「氣がまえ」「味・趣き」

「調べ」と訳す（『滄浪詩話』明德出版社、一九七六年、三十五頁）。

*審言：唐・杜審言のこと。唐・杜甫の祖父。

*句法：句の作り方や組み立て方。因みに、南宋・嚴羽『滄浪詩話』「詩

弁」に、以下のように言う。——其用工有三。曰起結、曰句法、曰

字眼。「其の工を用ふるに三有り。起結と曰ひ、句法と曰ひ、字眼と

曰ふ」。——市野沢寅雄氏によれば、「句法」とは、「句づくり。単独

に一句ひとづつだけでなく黏不黏等の句間の法則も問題」と言う（前掲

書、三十五頁）。なお、宋末元初・張炎の『詞源』にも、「句法」の

項目がある（『宋代の詞論—張炎『詞源』—』詞源研究会、中国書店、

二〇〇四年、八十三頁）。

*庾信：南朝・梁の詩人。国使として北朝・西魏に赴いたが、長安に抑

留され、そのまま西魏に仕え、さらに北周に仕えることとなった。

矢嶋美都子論文「杜甫の詩に見る六朝詩人観」（『六朝学術学会報』

第六集、二〇〇五年）によれば、六朝の詩人を詠った杜甫の詩の中

で、庾信を詠った詩が九例あり、陶淵明に次いで数が多いと言う。

【通釈】

黄庭堅が言うには、「杜甫の詩の法は杜審言から出て、句の法は庾信から出ている。ただ彼らを乗り越えているだけだ。範とすべきすぐれたものは、杜甫の詩の法、韓愈の文の法である。詩文にはそれぞれスタイルがある。韓愈は文で詩を作り、杜甫は詩で文を作った。だからうまくないのである」と。

十

黄魯直謂白樂天云「笙歌歸院落、燈火下樓臺」、不

如杜子美云「落花遊絲白日靜、鳴鳩乳燕青春深」也。

孟浩然云「氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城」、不如九僧云「雲

中下蔡邑、林際春申君」也。

【校異】

校一：「云」の字は、もとは脱落していた。適園本によって補う。

校二：「不如九僧云……」は、適園本は「不如『光涵太虛室、波動岳陽樓』

爲雄渾也」に作る。

【訓読】

黄魯直 謂へらく、白樂天の「笙歌 院落に帰り、灯

火 楼台より下る」と云ふは、杜子美の「落花 遊糸
白日静かに、鳴鳩 乳燕 青春深し」と云ふに如かざる
なり。孟浩然の「気は蒸す 雲夢の沢、波は撼く 岳陽
の城」と云ふは、九僧の「雲中の下蔡邑、林際の春申君
と云ふに如かざるなり」と。

【語釈】

*白樂天：唐・白居易のこと。樂天はその字。引用の二句は、五言律詩「宴散」詩の頷聯。

*杜子美：唐・杜甫のこと。子美はその字。引用の二句は、七言律詩「題省中壁」詩の頷聯。

*遊絲：風にただよう蜘蛛の糸。

*孟浩然：唐の詩人。引用の二句は、五言律詩「望洞庭湖上張丞相」詩の頷聯。なお、詩題を「臨洞庭」に作るテキストもある。

*雲夢澤：洞庭湖畔を包み込むように広がる湿原。

*岳陽城：洞庭湖の東に位置する町。今の湖南省岳陽市。岳陽楼があること有名。

*九僧：北宋初期の詩によって名高かった九人の僧。『九僧詩』という詩集があったとされる。詳しくは、拙稿『温公統詩話』訳注稿「言語と文化」第九号、愛知大学語学教育研究室、二〇〇三年）を参照。

*下蔡邑：春秋時代・蔡国の最後に置かれた都。蔡は初め上蔡（河南省上蔡）に都を置いたが、その後、新蔡（河南省）に遷都し、さらに

下蔡（安徽省鳳台）に遷都した。前四四七年に楚によって滅ぼされた。

*林際春申君：「春申君」は、戦国時代・楚の公子で宰相であった黄歇の封号。三千人の食客を養い、斉の孟嘗君・趙の平原君・魏の信陵君とともに戦国の四君子と称される。また、呉の山上に城を築いて自

分の都邑とした。「林」は、その都邑を築いた山の林を指すであろう。

【通釈】

黄庭堅が評して言うには、白居易の「笙の音に合わせ
て歌うなか、中庭を通つて帰り、灯火を頼りに楼を下つ
ていく」という句は、杜甫の「風に落ちる花、風に吹か
れる蜘蛛の糸、空には太陽が静かに白く輝き、連れを求
めて鳴くイカルガ、餌を待つツバメの雛鳥、春は青々と
深まりゆく」という句には及ばない。孟浩然の「蒸気た
ちこむ雲夢の沢、波ゆらぐ洞庭湖畔の岳陽の城」という
句は、九僧の「雲の中にあるかのような下蔡の都、林の
際に都邑を築いた春申君」という句には及ばない、と。

十一

蘇子瞻云、「子美之詩、退之之文、魯公之書、皆集
大成者也」。

【訓読】

蘇子瞻云ふ、「子美の詩、退之の文、魯公の書、皆な集
大成なる者なり」と。

【語釈】

*蘇子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。ここに引用されている蘇軾の言葉は、彼の集には見えない。ただし、「書吳道子畫後」の中に以下のような類似の言及が見える。——故詩至于杜子美、文至于韓退之、畫至于顏魯公、畫至于吳道子、而古今之變、天下之能事、畢矣。〔故に詩は杜子美に至り、文は韓退之に至り、書は顏魯公に至り、画は吳道子に至りて、古今の變、天下の能事、畢れり。〕——

*子美：唐・杜甫のこと。子美はその字。

*退之：唐・韓愈のこと。退之はその字。

*魯公：唐・顏真卿のこと。書に優れ、草書・楷書に巧みであった。魯郡公に封ぜられたので、顏魯公とも呼ばれる。

【通釈】

蘇軾が言うには、「杜甫の詩、韓愈の文、顏真卿の書はいずれもそれぞれの分野の集大成である」と。

十二

學詩當以子美爲師。有規矩故可學。退之於詩、本無解處、以才高而好爾。淵明不爲詩、寫其胸中之妙爾。學杜不成、不失爲工。無韓之才與陶之妙、而學其詩、終爲樂天爾。

【訓読】

詩を学ばんとすれば当に子美を以て師と為すべし。規矩有れば故に学ぶべし。退之 詩に於いては、本より解する処無く、才の高きを以て好きのみ。淵明は詩を為らず、其の胸中の妙を写すのみ。杜を学びて成らざるも、工たるを失はず。韓の才と陶の妙無くして、而して其の詩を学ばば、終に樂天と為るのみ。

【語釈】

*淵明：東晉・陶潛（淵明）のこと。

*學杜不成、不失爲工：杜甫の詩を学ばば、たとい杜甫の域にはたどり着けなくても、そこそこ巧みな詩ができるということ。北宋・黄庭堅の「與趙伯充」に、以下のような類似の言及がある。——學老杜詩、所謂「刻鵠不成、尚類鶩」也。「老杜の詩を学ばば、所謂「鵠を刻みて成らざるも、尚ほ鶩に類す」なり。——「鵠」は、大鳥。「鶩」は、アヒル。

*樂天：唐・白居易のこと。樂天はその字。元稹と親交を結び、ともに平易の詩を目指した。とりわけ白居易は、詩の多くを陶淵明に学んだ。北宋・蘇軾は、「祭柳子玉文」の中で、彼らの詩を批判的に評して「元輕白俗」と言つた。

【通釈】

詩を学ぼうとするならば当然杜甫をその先生とするべきである。そこには規範があるからこそ、学ぶことができるのである。韓愈は詩においては、まったく分かりや

すいところがなく、その才能の高さによつてすばらしいだけなのである。陶淵明は詩を作つたのではなく、自らの胸中にある妙趣を写し取つただけなのである。杜甫に学べば（杜甫のように）なれなくとも、そこそこ巧みな詩はできる。韓愈の才能と陶淵明の妙趣がないまま、彼らの詩を学んでしまつたならば、結局のところ白楽天ぐらいにしかねないであろう。

十二

退之詩云、「長安衆富兒、盤饌羅羶葷。不解文字飲、惟能醉紅裙」。然此老有二妓、號絳桃・柳枝。故張文昌云、「爲出二侍女、合彈琵琶箏」也。又爲李于志叙當世名貴、服金石藥、欲生而死者數輩、著之石、藏之地下。豈爲一世戒耶。而竟以藥死。故白傳云、「退之服硫黃、一病竟不痊」也。

荆公詩云、「力去陳言誇末俗、可憐無補費精神」。而公平生文體數變、暮年詩益工、用意益苦【校一】。故知言不可不慎也。

【校異】

校一：「平生」「工、用意益」は、もとは脱落していた。適園本によつて補う。

【訓読】

退之の詩に云ふ、「長安 富兒 衆おほくして、盤饌 羶葷を羅ぬ。文字の飲を解せず、惟だ能く紅裙に酔ふのみ」と。然れども此の老に二妓有りて、絳桃・柳枝と号す。故に張文昌、「爲に二侍女を出だし、琵琶と箏とを合弾せしむ」と云ふなり。又た李于の志を爲り、当世の名貴金石の薬を服し、生を欲するも死する者数輩あるを叙し、之を石に著し、之を地下に蔵す。豈に一世の戒めと爲さんか。而して竟に薬を以て死す。故に白傳、「退之 硫黄を服し、一たび病みて竟に痊いえず」と云ふなり。

荆公の詩に云ふ、「力めて陳言を去りて末俗に誇る。憐れむべし 精神を費やすを補ふこと無きを」と。而して公は平生 文体数しば変じ、暮年 詩は益ます工たくみにして、意を用ふるに益ます苦しむなり。故に言は慎まざるべからざるを知るなり。

【語釈】

*「長安」の四句・唐・韓愈の五言古詩「醉贈張秘書」詩の一節。

*盤饌：大皿や鉢に盛つたご馳走。

* 糞草：血腥い肉料理と臭みの強い野菜。

* 文字飲：詩を賦したり文を論じ合つて酒を飲むこと。

* 紅裙：赤いスカート。妓女や美しい女性を表す。

* 張文昌：唐・張籍のこと。文昌はその字。韓愈に師事した。

* 「爲出」の二句：唐・張籍の五言古詩「祭退之」詩の一節。『全唐詩』

卷三三三は、「爲出」を「乃出」に作る。

* 李于志：韓愈の「故太學博士李君墓誌銘」を指す。墓誌銘によれば、

李于は、韓愈の兄の孫娘の婿で、方士から得た鉈石の薬によつて死

んだという。また、この墓誌銘には、薬の犠牲になった当時の貴人

たちのこともあわせて記されている。

* 金石：硫黄や水銀などの鉱物。不死の薬とされた。

* 豈爲一世戒耶：ああ、世の中の戒めにしようとしたのであろう、の意。

「豈く耶」は、ここでは詠嘆を表す。

* 白傅：唐・白居易のこと。晩年に太子少傅を授けられた。

* 「退之」の二句：白居易の五言古詩「思舊」詩の一節。

* 荆公：北宋・王安石のこと。晩年に荆国公に封ぜられた。

* 「力去」の二句：王安石の七言絶句「韓子」詩の末尾の二句。

* 末俗：世俗の人々。

* 費精神：ここでは、詩語の選択に神経をすり減らすこと。

* 用意：内容や主題を考えること。

【通釈】

韓愈の詩に言う、「長安には金持ちが多く、大皿には肉や野菜などのご馳走がならんでいる。しかし彼らは、詩を賦したり文を論じたりしながら酒を飲むことを知らず、ただ妓女の赤いスカートにうつつり酔いしれること

しかできないのだ」と。ところが、この老人には二人の妓女がいて、その名を絳桃・柳枝といった。だから張籍は、「私のために二人の侍女を登場させ、琵琶と箏を弾かせたのだ」と言つたのである。韓愈はまた、李于の墓誌銘を作り、当時の貴人たちの中に、鉈物の薬を服用して、不老長生を望みながら死んだ者が数人いたことを述べ、それを石に記して、地下に埋めた。ああ、世の中の戒めとしようとしたのであろう。ところが彼自身は、結局のところ薬によつて死んでしまったのである。だから白居易は、「韓愈は硫黄を服用して、病を発するやついに治ることはなかった」と言っているのである。

王安石の詩に次のように言う、「韓愈は陳腐な言葉を取り去つて世俗の人々に自慢したが、詩語の選択に神経をすり減らし、それを補うことがなかったのは、実に気の毒なことである」と。ところが、王安石も平素よりそのスタイルがたびたび変化して、晩年の詩はますます技巧を凝らすようになり、描こうとする内容を考えるにあつてはますます苦悩するようになったのである。

これらのことから、言葉というものは、慎まなわけにはいかないことが分かる。

十四

子美懷薛據云、「獨當省署開文苑、兼泛滄浪學釣翁」。
「省署開文苑、滄浪憶釣翁」、據之詩也。

【訓読】

子美 薛據を懐ひて云ふ、「独り省署に当たりて文苑を開く、兼ねて滄浪に泛びて釣翁に学ぶ」と。「省署にて文苑を開き、滄浪にて釣翁を憶ふ」とは、據の詩なり。

【語釈】

*子美：唐・杜甫のこと。子美はその字。

*薛據：唐の人。王維や杜甫と交流があった。尚書水部郎中の官に就いた。

*「獨當」の二句：唐・杜甫の七言絶句「解悶十二首」其四の末尾の二句。

薛據のことを思い慕って作った詩。前半の二句に、以下のようにある。——沈范早知何水部、曹劉不待薛郎中。「沈范 早に何水部を知るも、曹劉 薛郎中を待たず」。——当時、尚書水部郎中であつた薛據を、同じく水部の官にあつた南朝梁・何遜になぞらえ、「沈約と范雲は早くから何遜の才能を理解してくれたが、曹植と劉楨は薛據を待たずにこの世を去つた」と詠う。つまり、何遜と同様、文学の才能がありながら、何遜と異なり、それを理解してくれる者が薛據の周りにはいなかったことをいう。ここでの「獨」は、そのような情況をふまえていよう。

*省署：中央の役所。ここでは、薛據が水部郎中として勤めていた尚書

省を指す。

*開文苑：文壇を創設する、の意。ここでは、文学活動をするをいう。

*滄浪：青い水の色。一説に、川の名。ここでは、『楚辭』「漁父」に引く、漁父が屈原に向かって歌つた、以下の歌を踏まえていよう。——滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足。（滄浪の水清まば、以て我が纓を濯ふべし、滄浪の水濁らば、以て我が足を濯ふべし）。——これより「滄浪」は、隱遁を象徴する言葉として用いられる。

ちなみに、清・仇兆鰲『杜詩詳注』卷十七では、以下のように注されている。——當省署、昔爲部郎。泛滄浪、今客荆楚。（省署に当たるとは、昔 部郎と爲る。滄浪に泛ぶとは、今 荆楚に客たり）。——

*「省署」の二句：『全唐詩』卷二五三には、薛據の「句」として、この二句のみが収録されている。

【通釈】

杜甫が薛據を思い慕って詠つた詩に次のように言う。「かつて役所勤めをされていた時は、ただ独り文学活動に奮闘されていたが、退任後の今は、さらに滄浪の水に舟を浮かべて、年老いた釣り人の生き方を学んでおられるのでしよう」と。「かつて役所では文学活動をしていたものだが、今は滄浪の水の上で年老いた釣り人の生き方を思い慕う」というのは、薛據の詩である。

十五

王摩詰云、「九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒」。^{〔校一〕}子美取作五字云、「闔闔開黃道、衣冠拜紫宸」。而語益工。

〔校異〕

校一：もとは「宮殿開闔闔」に作る。適園本によって改める。

〔訓読〕

王摩詰云ふ、「九天の闔闔 宮殿を開き、万国の衣冠 冕旒に拝す」と。子美取りて五字と作して云ふ、「闔闔 黄道を開き、衣冠 紫宸に拝す」と。而して語は益ます 工なり。

〔語釈〕

- * 王摩詰：唐・王維のこと。摩詰はその字。
- * 「九天」の二句：王維の七言律詩「和賈舍人早朝大明宮之作」詩の頷聯。
- * 闔闔：天上界にある紫微宮という宮殿の門。天子の住む宮殿の門の美称。
- * 衣冠：官僚のこと。
- * 冕旒：天子が用いる冠とひもでつづつた飾り玉。天子を指す。
- * 「闔闔」の二句：杜甫の五言排律「太歲日」詩の第三聯。
- * 黄道：ここでは、天子が出遊する時に通る道のこと。
- * 紫宸：天子の御殿の名。

〔通釈〕

王維の詩に次のように言う。「天上界を思わせる闔闔門が開き天子様の宮殿へと道が通じ、全ての国々の官吏たちが天子様に拝謁をする」と。杜甫はこの詩句を踏まえて五言の句に作りかえ、次のように詠った。「闔闔門が開き御成り道が通じ、官吏たちが紫宸殿で天子様に拝謁する」と。それでいて、その言葉はますます巧みなものとなっている。

十六

楊大年「傀儡」詩云、「鮑老當筵笑郭郎、笑他舞袖太郎當、若教鮑老當筵舞、轉更郎當舞袖長」。語俚而意切、相傳以爲笑。

〔訓読〕

楊大年の「傀儡」詩に云ふ、「鮑老 筵に当たりて郭郎を笑ふ、他を笑ふは 舞ふ袖 太だ郎当たればなり、若し鮑老をして筵に当たりて舞はしめば、転た更に郎当として 舞ふ袖 長からん」と。語は俚なるも意は切なれば、相ひ伝へて以て笑ひと為す。

【語釈】

*楊大年：北宋・楊億のこと。大年はその字。錢惟演・劉筠らと唱和した詩を集めて『西崑酬唱集』を編纂した。晩唐・李商隱を尊び、対偶・典故を重んじ、巧緻をきそつた詩風は、西崑体と呼ばれ、北宋の初期に流行した。

*傀儡詩：楊億の「傀儡」詩は、『全宋詩』卷二二二に収録されている。「當」「郎」「長」、および「鮑」「老」「笑」「教」など、母音を共通する字を多用し、一種の言葉遊びをしている。

*鮑老：役者の名。

*郭郎：役者の名。

*郎當：衣服がだぶだぶで体に合わないさまを表す疊韻の擬態語。

【通釈】

楊億の「傀儡」詩に次のように言う。「鮑老 酒盛りの席にて郭郎を笑う。彼を笑うは 舞う袖大きく だぶだぶだから。でももし鮑老 酒盛りの席にて舞わせたら、袖長すぎて もつとだぶだぶ」と。言葉は卑俗であるが、内容は射ているので、伝えて笑い草としたのである。

十七

呉越後王來朝、太祖爲置宴、出内妓彈琵琶。王獻詞曰、「金鳳欲飛遭掣擲、情脉脉、看取玉樓雲雨隔」。【校一】太祖起、拊其背曰、「誓不殺錢王」。

【校異】

校一：「取」の字は、もとは「即」に作る。適園本によって改める。

【訓読】

呉越の後王 來朝し、太祖 爲に宴を置き、内妓を出だして琵琶を弾かしむ。王 詞を献じて曰く、「金鳳 飛ばんと欲して掣擲に遭ふ。情は脈脈たるも、看取す 玉樓の雲雨に隔てらるるを」と。太祖起ちて、其の背を拊でて曰く、「錢王を殺さざると誓ふ」と。

【語釈】

*呉越後王：五代十国の一つ、呉越の最後の王、錢俶のこと。宋に抵抗することなく帰順した。事は、『宋史』卷四八〇「世家三・呉越錢氏」に見える。

*「金鳳」の三句：『全唐五代詞』正篇卷三には、「失調名」として、この三句のみが収録されている。ただし、「取」を「即」に作る。

*掣擲：抑えて自由にさせないこと。

*脉脉：何も言わずじつと見つめるさま。

【通釈】

呉越の後王錢俶が宋の朝廷にやって来たので、太祖は宴席をもうけて、妓女を呼び出し琵琶を弾かせた。錢俶は詞をたてまつつて次のように言った。「金の鳳は飛び立とうとしたところ、捕らえられ縛り上げられてしまいました。故郷への思いを胸に秘めつつ、玉の御殿をじつ

とみつめるものの、ただ目に映るのは、視界を遮る雲と雨ばかり」と。太祖は立ち上がって、その背中を撫でて言った。「錢王は殺さないと誓おう」と。

十八

武才人出慶壽宮、色最後庭、裕陵得之。會教坊獻新聲、爲作詞、號「瑤臺第一層」。

【校異】

校一：「才」「壽」の字は、もとは脱落していた。「坊」の字は、もとは「場」に作る。適園本によって補いかつ改める。

【訓読】

武才人 慶壽宮より出でしとき、色 後庭に最たれば、裕陵 之を得たり。会^{たま}たま教坊 新声を献ずれば、為に詞を作りて、「瑤台第一層」と号す。

【語釈】

- * 武才人：「才人」は、後宮の妃嬪の一つ。武氏については、未詳。
- * 慶壽宮：後宮にある宮殿の一つ。
- * 後庭：後宮。転じて后妃などを総称する。
- * 裕陵：北宋・神宗のこと。死後、永裕陵に葬られたのでそう称する。
- * 教坊：官設の音楽・歌舞の教習所。
- * 「瑤臺第一層」：詞牌の一つ。『詞譜』巻二十五に収録。ただし、詞牌

下の注には、「宋陳師道後山詩話」として、本節を引く。

【通釈】

武才人が慶壽宮から出てきたとき、その美しさが後宮の女性たちの中でも第一であったので、神宗は彼女を手に入れた。その時たまたま教坊が新しい音楽を献上したので、彼女のために詞を作り、それを「瑤台第一層」と呼んだ。

十九

宋玉爲「高唐賦」、載巫山神遇楚襄王、蓋有所諷也。而文士多效之者。又爲傳記以實之、而天地百神舉無免者。余謂欲界諸天、當有配偶、其無偶者、則無欲者也。唐人記后土事、以譏武后爾。

【訓読】

宋玉 「高唐の賦」を為り、巫山の神 楚の襄王に遇ふを載するは、蓋し諷する所有ればなり。而して文士 之に效^{なま}ふ者多し。又た伝記を為りて以て之を實とし、而して天地の百神 挙^{こま}く免るる者無し。余 謂へらく、欲界諸天、当に配偶有るべきにして、其の偶無き者は、則ち

欲する無き者なり、と。唐人 后土の事を記すは、以て武后を譏るのみ。

【語釈】

* 宋玉：戦国・楚の文人。屈原の弟子。

* 「高唐賦」：宋玉の代表作の一つ。楚の襄王が宋玉を連れ、雲夢の台に遊び、高唐の楼観を眺めた折りに、その上にだけ雲気が湧き起るのが見えた。それが父の懷王が一夜を過ごした巫山の神女だといふことを宋玉から聞いた襄王は、自らも一目その神女に逢いたいと思ひ、宋玉に命じて賦を作らせた。それが「高唐賦」である。さらに襄王は「神女賦」を作らせたが、結局のところ巫山の神女に逢うことは叶わなかつた。宋玉の賦はいずれも『文選』巻十九に収められている。

* 巫山神女遇楚襄王：巫山の神女が出会つたのは、正確には父の懷王である。

* 欲界諸天、當有配偶：「欲界」は、人の住む下界のこと。「諸天」は、天界のこと。下界の人も、天界の神も、当然配偶者を必要とするはずだ、ということ。

* 唐人記后土事：「后土」は、土地の神のこと。「后土事」は、「后土夫人の伝」を指すであろう。南宋・胡仔の『苕溪漁隱叢話』後集卷十八「羅隱」に引く、北宋・嚴有翼の『藝苑雌黃』に以下のようにある。——

唐人作后土夫人傳。予始讀之、惡其瀆慢而且誣也。比觀陳無己詩話云、「宋玉爲高唐賦、……唐人記后土事、以譏武后耳」。予謂武后何足譏也。而託之后土、亦大褻矣。（唐人 后土夫人の伝を作る。予始めて之を読み、其の瀆慢にして且つ誣くを惡むなり。比る陳無己の詩話を觀るに、「宋玉 高唐賦を為り、……唐人 后土の事を記すは、以て武后を譏るのみ」と云ふ。予 謂へらく、武后 何ぞ譏る

に足らんや、而して之を后土に託すも亦た大いに褻れり。——嚴有翼は「后土夫人伝」が武后非難を意図したものではないと指摘するが、后土夫人の廟には、韋郎という名の少年が併せて祀られており、その様子が年若い男を寵愛した武后に似ていることから、武后批判を意図したものとする解釈も行われていたようである。ちなみに、「后土夫人」の事の詳細は、『太平廣記』卷二九〇「妖妄三・諸葛殷」に見える。

* 武后：武后は、名は照。もとは唐・太宗の後宮に才人として仕えたが、後に太宗の子・高宗の皇后となり、さらに実権を握り自ら帝位につき、国号を周に改めた。死後、「則天」と諡されたことから、則天武后と呼ばれる。

【通釈】

宋玉が「高唐の賦」を作るにあたり、巫山の神女が楚の襄王と遭遇したことを書き記したのは、おそらく諷刺しようとするところがあつたからであろう。そして文士たちの多くがこれに倣つた。彼らもさらに伝記を作つて、それを事実であるとし、その際に天地の神々はことごとく彼らに書き記されて、彼らの手から逃れられた者はいなかつた。私が思うに、下界の人も、天界の神も、当然、配偶者を必要とするはずである。配偶者がいないのは、それを望まない者なのだ。唐代の人々が（韋郎という少年と一緒に祀られた）后土夫人の事を書き記したのは、そのことによつて（若い男を侍らせていた）武后を非難

しようとしたのである。

二十

黄詩韓文、有意故有工。左杜則無工矣。然學者先黄後韓、不由黄韓而爲左杜、則失之拙易矣。

【校異】

校一：「左杜」は、もとは「老杜」に作る。「後」は衍字。「爲」の字は、もとは「由」に作る。適園本によつて削りかつ改める。

【訓読】

黄の詩 韓の文、意有れば故に工有り。左杜は則ち工無きなり。然れども学ぶ者 黄を先とし韓を後とし、黄韓に由らずして左杜と為らんとす。則ち之を拙易に失せん。

【語釈】

*黄詩：北宋・黄庭堅の詩。その詩は、典故を用い修辭に凝ること知られる。

*韓文：唐・韓愈の文。

*工：ここでは、技巧、工夫の意。「上手だ」の意と區別するため、訓読では「工」と読んでおく。

*左杜：戦国時代の『春秋左氏伝』を書いた左丘明と唐の詩人の杜甫。

*先黄後韓：この四字は意味が取りにくい。【校異】では、「後」を衍字

とする。あるいは、「黄庭堅を先にし韓愈を後にする」というのは、詩文の学び方がたがひなことを言うのであろうか。ここではひとまず、そのように解釈しておく。

*拙易：粗雑で浅はかなこと。

【通釈】

黄庭堅の詩と韓愈の文は、意図があつて技巧が施されているのである。一方、左丘明の文と杜甫の詩には技巧が見られない。しかし、詩文を学ぶ者は、黄庭堅を先として韓愈を後としたり、黄庭堅や韓愈を学ぶ道を経ずに、左丘明や杜甫のようにならうとする。そんなことでは、粗雑で浅はかな詩文しか作れなくなるであらう。

(次号に続く)